

**Subject：斎藤隆夫議員の【反軍演説 1940年】**

60代の先達から教わりました。昔は、政府が極度に右よりに振れるとマスコミは必ず「斎藤隆夫議員の【反軍演説】」を引き合いに出して批判をしていたようですが、今の大手メディアはほとんど官報と化し、【反軍演説】などほとんど聞くことがなくなったと。詳細を知らなかったので調べてみたところ、今知っておくべきことだなと納得。

斎藤議員は、弁護士となった後にアメリカのイェール大学へ留学し、帰国して衆議院議員に当選しました。時は1940年、青年将校が政府要人を次々と暗殺した二二六事件が起こり、政府や政治家は軍部に対して批判することをためらっていた正にその年、斎藤議員は帝国議会で軍部の暴走と政府の黙認に対して反論する質疑を行いました。これが反軍演説と呼ばれ、議員としての命を賭した責任感と矜持もさることながら、その確な内容から、後世まで名を残す名演説となったそうです。

その内容は、日中戦争（支那事変）に対する根本的な問いと批判を提起し：

- 第一、近衛声明なるものは事変処理の最善を尽したるものであるかどうか
- 第二、いわゆる東亜新秩序建設の内容は如何なるものであるか
- 第三、世界における戦争の歴史に徴し、東洋の平和より延（ひ）いて世界の平和が得らるべきものであるか
- 第四、近く現われんとする支那新政権に対する数種の疑問
- 第五、事変以来政府の責任を論じて現内閣に対する警告等

穏やかな口調でありながら、的確で練りに煉られた論点を元に質された1時間30分にわたる質疑に対して、議会中は水を打ったように静まりかえり、ほとんど野次も上がらなかったそうです。この演説全文を新聞各紙が全国的に取り上げ、さらに交戦中の中国や、遠く米国でも報道されたそうです。その後、内閣・軍部に反したということで、民政党から除党処分を受け、衆議院も除名されてしまいます。

◆斎藤が除名後に詠んだ漢詩です。

- 吾言即是万人声（吾が言は、即ち是れ万人の声）
- 褒貶毀誉委世評（褒貶毀誉〈ほうへんきよ〉は、世評に委す）
- 請看百年青史上（請う百年青史の上を見ることを）
- 正邪曲直自分明（正邪曲直、自ずから分明）

【概略】私の言葉は国民みなの声です。私のへの毀誉褒貶（ほめたり、けなしたりすること）は、世の中に全てお任せします。100年経った後、歴史の上から見て欲しい。正しかったか、悪かったか、曲がっていたか、真っ直ぐであったか、自ずと明らかになっているでしょう。

私利無く、名声肩書きに執着せず、世相に流されることなく、正に生命をかけて天下万民の将来のために【そもそも】を突き詰め続ける姿勢。石田禮助の名演説【祖にして野だが卑ではない】と同様、激しく心動かされました。